

戦後日本の人類学史 (1)

中 生 勝 美

キーワード：人類学史、アメリカの日本研究、東南アジア稲作民族文化総合調査、
照葉樹林文化論、京都大学のヒマラヤ登山とアフリカ研究

はじめに

2001年10月6日に、京都で「今西錦司生誕100年記念シンポジウム」があった。このシンポジウムで、平井一正神戸大学名誉教授が、AACK (Academic Alpine Club of Kyoto) の歴史について基調報告をした。筆者は京都学派の戦前から戦後にかけてのつながりを期待したが、講演はヒマラヤ登山を実現した戦後に重点を置いていた。今西錦司は、いわゆる西田幾多郎や田邊元など哲学者のグループの「京都学派」と並んで、京都大学人文科学研究所を中心とする学際的な生態学を主体とする「京都学派」の指導的研究者である。彼らの学問は、戦後に展開したのであるが、その出発点は戦前から始まっている。

今西が戦前からヒマラヤ登山を目指して組織したAACKは、当時未踏破だったK2登頂計画を立案したけれども、戦争のため実現できなかった。戦後になって、AACKの活動を再開し、1952年に日本山岳会マナスル登山偵察隊としてヒマラヤに足を踏み入れ、1958年、ついにAACK単独でチョゴリザ初登頂を果したのだった。

筆者は、戦前の日本の人類学史を『近代日本の人類学史』(中生 2015)にまとめ、第6章で戦前の京都学派の活動を分析した。学史を描くとき、戦争を分岐点とする連続性と断絶性をどのようにバランスを取るかは、悩ましい問題である。この基調講演は、今西に焦点を当てたので、戦前から戦後への連続性は自然なつながりであったが、戦後のチョゴリザ初登頂という成功体験に重点が置かれ、その前提となる戦前の活動への言及が少ないところに、私は多少不満が残った。なぜならば、戦時中に蒙疆政府の首都張家口に設立した西北研究所で、今西錦司所長と一緒に仕事をしていた藤枝晃から、当時でも、今西がチベット側からヒマラヤ登山を真剣に考えていたとの証言を聞いていたからである。

戦後日本のアカデミズムの展開は、一方でアメリカからの人文、社会科学理論の導入と、その展開という形で再出発するものもあれば、戦前からの連続性の延長線上に展開したものもある。前者は、戦後、連合軍の中に組織された民間情報教育局 (Civil Information and Education Section) の事例である。世論調査のための部局で、調査助手をしていた若手の日本人社会科学研究者によって、アメリカの社会科学理論は系統的に導入された。後者の事例は、先に挙げた京都学派もあるが、日本民族学会を中心とする日本の文化人類学も、アメリカの人類学の方法論を学び取りながら、戦前からの学知を継承している。

本稿では、戦前の日本の人類学が、どのようなプロセスで現在に至ったのかを鳥瞰し、日本の人類学の研究が、戦後急速に世界各地に及び、また研究層の厚い学知を形成したのかを記述したい。

第1章 アメリカの日本研究

アメリカの日本研究は、第二次世界大戦によって展開し、深化したといえる。ルーズ・ベネディクトの『菊と刀』は、戦時中の対敵研究として始められたレポートが元になっている。当時、ベネディクトが所属した戦時情報局 (Department of War information) で指導的な役割を果たしていたのは、ハーバート大学の助教授だったクラックホーンだった。

クラックホーンの当時の職位は助教授だったが、ハーバード大学でも「困ったときはクラックホーンに聞け」と学長から言われるほど政治手腕に秀でており、戦時中は戦時情報局に出向していた。そこで、対日戦略の立案にかかわっており、天皇制を廃止するか間接利用するかで、アメリカ政府と軍部の間で意見の相違があったのだが、クラックホーンは間接利用の立場から天皇制の温存を主張しており、その路線でベネディクトに日本人の心理のレポートを書かせたのである (クラックホーン 1971: 第7章)。

クラックホーンは、終戦直後の1945年9月に東京に来ており、空襲で廃墟となった東京の街が、整然と掃除されているところを見て、日本の復興が早いだろうという見解を新聞に書いている。彼が早い時期に日本へ来たのは、マッカーサー総司令官の特別顧問として、日本占領に関するアドバイザーに就任していたからである。彼が東京に来てした仕事は、占領軍に調査部を作ることだった。1946年に民間情報局 (Civil Information and Education, 略E) に世論調査部門 (Public Opinion Service) を作り、そこに人類学者を配置した。そこにいた人類学者の主任は、後にコロンビア大学の人類学教授になるハーバート・パッシンである。

日本民族学会の会長だった渋沢敬三や民俗学の創始者、柳田国男は、GHQに在籍する抜針を招へいして、アメリカ人類学の状況を講演するよう依頼した。この時、パッシンは日本の人類学者たちと初めて出会った。ちょうど、民間情報局は、アメリカ国務省から依頼で、日本社会が農地改革により、どのように変化するのかを調査を実施するため、そのアシスタントを探しており、柳田国男から弟子を紹介してもらった。パッシンの所属していた機関は、様々な部門からの調査の委託をうけていたが、その一つとして農地改革に伴う農村内部の社会変化を、農地改革の前後で調査をしたり、漁業権の調査をしたりしていた。そのほか、民法の家族法改正に関連して、日本の家制度の解体がどのような社会的影響を与えるかなども調査していた。

この時CIEにいたのは竹内利美、鈴木栄太郎、小山隆、喜多野清一、桜田勝徳、関敬吾、大藤時彦、石田英一郎、馬淵東一と人類学、民俗学で重要な役割を担った研究者がいた。石田は、当時民族学協会の機関誌『民族学研究』の編集をしており、CIEに勤務した時、パッシンに依頼して、ウィーン大学にあった岡正雄の博士論文、Kulturschichten in

Alt-Japan5 巻の独文原稿を1947年1月に取り寄せ、石田が司会をして岡正雄・八幡一郎・江上波夫で日本古代史に関する座談会を開催し、『民族学研究』13巻3号にこれを掲載、大きな反響を得て『日本民族の起源』（岡ほか 1958）として出版した。特に、江上波夫が主張した騎馬民族説は、東北ユーラシア系の騎馬民族が、南朝鮮を支配し、やがてそこを基地に日本列島に入り、4世紀後半から5世紀に、大和地方の在来王朝を支配ないしそれと合作して征服王朝として大和朝廷を立てたという説で、戦前の皇国史観を根底から揺るがす説として、一般から大きな反響を呼んだ。この学説は、日本の皇国史観に対抗する、日本人内部から提起された新しい天皇制史観として占領軍からも注目された。

また1946年にアメリカの教育使節団が来日し、日本の大学改革プランを提示したが、そのとき社会学と共に文化人類学の専攻を創設する提言をした。この提言を受けて民間情報局の嘱託をしていた石田英一郎は、東京大学に文化人類学のコースを作ることに尽力した。

また、1946年に英文で「日本民俗社会辞典」を編集する名目で、GHQから日本民族学会に資金が提供され、その成果として1952年に4冊の『日本社会民俗辞典』が日本語で出版された。この編纂役員名簿からも、パッシンの名前が見え、委員にCIEで調査員として雇われている研究者の名前が並んでいる。このことから、戦後、学会の運営資金がGHQから提供され、いち早く学会誌も再刊され、日本の人類学者は戦後アメリカの強い影響のもとに研究を再開することになった。

1943年に創設された国立の民族研究所の企画立案運営にあっていた岡正雄は、戦犯容疑をかけられていた。岡正雄の息子、岡千曲によると、戦時中、岡は専用の飛行機まであったのだが、戦後GHQからの追及で、民族研究に関係していた軍関係者が、専用飛行機はなかったと証言してくれたおかげで戦犯の追及を免れたのだという。岡正雄は、1950年から学会に復帰し、51年から東京都立大学に教授として赴任してから、カリスマ的指導力で、日本民族学会の活動を始めた。

戦後、岡はこの時期のことを、次のように語っている。1943年に文部省直属の民族研究所が創設された。文部省予算で調査隊を派遣するのは難しいので、民族学協会を再編して財団法人をつくり、東亜煙草とか昭和通商からの寄付を集めて¹、調査費を補充した。1945年9月に文部次官や局長と話して、民族研究所は廃止しないと確約したのに、10月に前田多門文部大臣が戦時中にできた機関はすべて廃止すると発言して、突如廃止されることになった。これに抗議したが、文部省の学術局長や局長、課長が同情して、彼らも不本意だったので、民族学協会に民間研究機関として100万、200万と研究機関費をつけてくれた。そこでアイヌ調査とかメコン調査をやったのだという（岡 1981：681-682）。

岡が言及している「研究機関費」に関しては、石田英一郎が書いた「沙流アイヌの共同調査報告について」に正確な記述がある。石田によると、アイヌ民族総合調査は1950年度から企画を始め、1951年に「文部省の民間研究機関助成金並びに科学研究費交付金、国策パルプ、苫小牧製紙、本州製紙などの民間会社の寄付金を得て順調に進捗した」とある。この調査の成果は『民族学研究』16巻3・4号に12本の調査報告を特集した。

石田の解説によると、1951年3月に小山隆・鈴木二郎が家系をおこない、同年5月に泉靖一がアイヌ古来の狩猟採取生活で単的地縁集団の占有する iwor という境域概念の存在²、父系的親族構造の中に、母系に伝わる女子の upshor (女性の下着である下紐) 系統を中心として、外婚的規制が守られたことを発見した。そこで同年8月、泉靖一・杉浦健一・瀬川清子・石田英一郎・岡正雄が沙流川流域を共同調査した(石田 1952)。特集の報告うち、6本は文化系、8本は自然人類学の報告である。

第2章 東南アジア稲作文化調査団

戦後最初の大型海外調査は、東南アジア稲作民族文化総合調査である。1952年4月のサンフランシスコ平和条約発効により、連合軍の占領が終結して2年を経過した1954年に、創立20周年を迎えた日本民族学協会が、岡正雄理事長の主唱で、文部省、読売新聞の後援を得て、記念事業として東南アジア稲作民族文化総合調査の計画を立て、1957年に第一次調査としてベトナム、カンボジア、ラオス、タイの4か国に調査団を派遣した。

1957年3月刊行の第1次調査にむけた趣意書によれば、委員長は岡正雄がつとめ、幹事には馬淵東一、白鳥芳郎、河部利夫、松本信広(団長)、浅井恵倫、八幡一郎、関敬吾、宮本延人、西村朝日太郎、山本達郎、蒲生礼一が名前を連ねている。

前述した岡の回想によると、民族研究所が廃庁となった代償として、文部省が交付した民間研究機関助成金でアイヌ総合調査や東南アジア稲作文化調査ができたと話していた。別の立場から戦前の民族研究所と戦後の調査の関連に言及しているのが馬淵東一である。馬淵は学会の理事であったためだと思うが、アイヌ調査や東南アジア稲作文化調査に、企画の時点で参加していたにもかかわらず、「そのどれにも参加することなく終わった」と婉曲的に批判している。そこでこの調査企画は「文部省民族学研究所時代の後遺症を思わせるものを感じ」と、岡正雄への当てこすりの表現をしていた(馬淵 1988:344)。馬淵は、アイヌ調査も、杉浦健一とともに企画細目を作成していて、「いよいよ蓋をあける段になると、なぜか筆者は締め出しを食っていた」と書いている(馬淵 1974:539)。こうした事情のため、馬淵は1959年3月3日に民族学協会の理事を辞任し、1961年には機関誌の購読も停止するほど関係を悪化させている(馬淵 1988:41)。馬淵は、戦前、台北帝国大学を卒業し、そのまま助手として台北帝国大学に残ったので、日本国内との人間関係は希薄で、古野清人を台湾原住民調査に案内して交流があった程度だった。馬淵は、戦前からインドネシアに関心があり、第二次調査はインドネシアの調査であったので、調査申請段階で、理事として調査申請書を作成したのに、この調査団から外されたことに立腹したのは、理事の辞任からも読み取れる³。

このように、民族学協会の主催であったにもかかわらず、第一次調査団の団員に人類学者は少なかった。その構成員は、農学、言語学、民族学、考古・歴史学、技術文化以外に、読売新聞の報道・写真、映画班の5名、現地合流した医師、外務省留学生の各1名をくわえ、通訳、運転手あわせて、総勢21名の調査隊を組織した。計画ではベトナムも調

査地に入っていたが、ベトナム政府より査証が得られなかったため、ベトナム班の4人は参加できなかった。

第一次調査：1957年8月から約8ヶ月でカンボジア、ラオス、タイ（南ベトナムは実現せず）。

第二次調査：1960年2月から約3ヶ月でインドネシア（スマトラ、バリ、ロンボクなど）、及び南ベトナム。

第三次調査：1963年6月から約10ヶ月で、中部インドやネパール。

この3回の調査の中で、第2回は1959年に6か月の予定で計画していたのが、インドネシアの政情不安により入国許可がなかなか下りず、かつ政情不安なジャワ、スマトラを避けて、治安の良好なバリ島に調査地を定め、滞在が1か月あまりと短期間で終わった。ここでは、大規模な第1次調査、およびその後照葉樹林文化論として理論仮説を展開した第3次調査について述べたい。

東南アジア稲作文化調査団の成果は、短期間の広域調査と、若い研究者による長期調査により次のような成果を挙げた。



図表1 第1回東南アジア稲作調査団調査ルート

広域調査の旅程は、上記の地図（図表1）の通りであるが、具体的な活動は、2回の座談会と、調査団の活動の紀行文『メコン紀行：民族の源流をたずねて』（アジア稲作民族文化総合調査団編 1959）に詳しい。座談会の記録を見る限り、タイ・カンボジア・ラオスの現地事情、特に文化施設としての図書館、博物館、および農業技術、稲作技術につい

て、現地政府機関とヒヤリングを中心にしていることがわかる。

岩田慶治は、ラオスのメコン流域における民族分布、社会組織の変化、北部タイの稲作栽培過程、相互扶助関係で研究を発表し、綾部恒雄は低地ラオ族の村落構造の報告書を皮切りに、その後東南アジアのエキスパートになった。岩田慶治は、前述した『メコン紀行』や後述する『インドシナ研究』の調査報告には明確に書いていない調査の意図について、「日本民族に起源についての岡理論ないし岡仮説に由来するものであった」と明確に指摘している。この岡理論とは、彼のウィーン大学に提出した博士論文で、日本列島に伝播した種族文化を①母系的・秘密結社的・芋栽培＝狩猟民文化（メラネシア方面）②母系的・陸稲栽培＝狩猟民文化（東南アジア方面）③父系的・「ハラ」氏族的・畑作＝狩猟民文化（北東アジア・ツングース方面）④男性的・年齢階梯制的・水稲栽培＝漁撈民文化（中国江南地方）⑤父権的・「ウジ」氏族的＝支配者文化（アルタイ・朝鮮半島）と5つの系統に分けて分析しており、この仮説が、東南アジア稲作文化調査団の「隠れた底流」として日本の民族学研究を大きく推進する原動力となったと述懐している（岩田 1983：20-21）。

では、第一次調査の報告書『インドシナ研究』（松本信弘編 1965）の内容を見ていこう。

松本信弘 「古代インドシナ稲作民宗教思想の研究：古銅鼓の文様を通じて見たる」

八幡一郎 「インドシナ半島諸民族の物質文化にみる印度要素と中国要素」

清水潤三 「アンコール・ワット石柱にのこる日本人墨書の調査」

岩田慶治 「パ・タン村：北部ラオスにおける村落社会の構造」

綾部恒雄 「タイおよびラオスの村落生活：サンパトン（タイ）とパカオ（ラオス）比較上の覚書」

浜田秀男 「Rice in the Mekong Valleys」

長重九・栗山英雄 「Cultivated Rice Plants in the Basin of Mekong River」

まず、松本論文は、インドシナの儀式に使われる古銅鼓の文様に関する論文である。一部に第一次調査として、タイ・カンボジア・ラオス、第二次として南ベトナムでの博物館での調査成果を入れているが、大半は文献研究である。次に、八幡論文は、物質文化として現地で収集したなた^{なた}鉞（山刀）、小すき^{すき}鋤、すき^{すき}犁、爪鎌、鎌を図、あるいは写真で示し、インドと中国の農具と比較している。次の清水論文は、稲作文化のテーマとは外れるが、調査の途中に、松本隊長と二人でアンコール・ワットを訪れ、日本人の墨書を収集して分析している。これも、先行研究の記述が中心になっているが、先行研究の基礎の上に、自らの収集したものを加えた論文になっている。最後の英文の論文2本は、調査で収集した米に関する植物学的分析なので、ここではその内容について省略する。

フィールドワークとして重要なのは、長期調査として現地に残った岩田と綾部の報告である。綾部はタイとラオスの短期滞在の記録で、村落の概略に終わっているが、岩田のラオスのパ・タン村報告は、その後の岩田の研究の出発点として重要である。岩田は稲作文化の調査が終わっても11年後に再訪して、その後の彼の研究に大きな位置を占めており、

絶えずパ・タン村に言及しているのです、本稿では岩田の報告を中心にまとめていきたい。

岩田慶治は、東南アジアへ行く前に日本で奈良県盆地の村、富山県の砺波平野の散居集落で調査をして、海外調査はその延長線上で企画された(岩田 1995:8)。岩田の調査地であるパ・タン村は、ラオスの首都ヴィエンチャンと王都ルアンプラバンの中に位置している。調査地は、諸民族の交渉の調査を意図したとあるが(岩田 1965:289)、後に岩田は、この村を調査地に選んだのは「そこで山地と平地に住む、さまざまな民族、または平地の川沿いに、その上・中・下流部に住んでいるさまざまなエスニック・グループが交錯していたからであった」と民族交渉の多様性を調査する目的を語っている(岩田 1995:27)。わずか4か月の滞在で、言葉の問題もあるにもかかわらず、地域の地理的環境や民家と屋敷の構造など、直接観察で調査が可能な分野から始め、99戸の全世帯調査による家族形態、人口構成、出生児数、家系継承と婚姻形態など、基本的な統計分析、および親族集団であるスア・ディオ・カン(Sua Diaw Kan)の具体例と、その組織のあいまいさや弱体化を、農業の共同作業から分析している。

岩田は、家族と親族の具体例から、社会変化の過程を分析して、第一に<種族社会の安定期>→<分村・開拓期ないし移動期>→<第2の安定期>の推移を想定している。そのうえで、第二は、大局的に<部族社会>→<地方社会>また<血縁集団>→<地縁集団>への変化ととらえている(岩田 1965:353-354)⁴。興味深いのは、血縁集団で男の生産活動に依存が多く夫系系譜で集結されているのが、地縁集団では女の経済力が社会的重要性を増すとして、父系社会が解体し双系の社会への統合、あるいは男性社会以前に基底として双系の社会の推定をしている。この社会変化の背景に、ラオ族(タイ諸種族)の南下移動を想定し、集落ごとの移動経路をオーラル・ヒストリーから再現している。この村を調査した当初の目的であった民族関係は、パ・タン村周辺の村落調査、パ・タン村の通婚圏、異民族との通婚の実例から分析されており、異民族間の物的・人的・言語的コミュニケーションは対等な立場ではなく、パ・タン村はラオ族が強い影響力を持った地域であるが、メオ族・ヤオ族・プーテン族などは、それぞれ独自の地域文化を割り当てられ、共存の秩序が保たれていると結論付けられている。

岩田慶治の民族誌は、様々な制約が多い中で、基本的なデータをおさえ、当初の目的である異民族関係を分析することに成功している。さらに、岩田は、パ・タン村で村の社会、生活、考え方を学んだだけでなく、その後の研究テーマとなる日本の神と東南アジアのカミを比較する出発点になったと回想する。また村の風景と生活も印象に強く、後の景観学につながるものであるし、民族の誕生、国民形成のプロセスについても考えるヒントになっている(岩田 1995:25-26)。岩田は、最初の調査が終了して11年後の1968年に、パ・タン村を再訪しており、この村での調査経験は、彼が東南アジア地域研究を展開するうえで、絶えず基礎となった重要な民族誌となっている。

田口理恵は、稲作調査団と同時期に実施された大阪市立大学の東南アジア調査団との比較から、つぎのように述べている(田口 2010)。「稲作調査団が文部省補助金を得て、す

でに外貨割り当てを受けていたこともあり、同時期に調査を計画していた大阪市立大学東南アジア学術調査隊は「1日4ドル、100日分」の外貨割り当てしか得られなかった。第1回の調査隊隊長は梅棹忠夫で、調査紀行『東南アジア紀行』をものしている。田口理恵は、この本から梅棹が東南アジア稲作調査団をライバル視するような複雑な心境が見え隠れすると指摘している⁵。

大阪市立大学の企画は、もともと京都大学の教授を中心に生物誌研究会が結成され、人文系諸科学を含めて探検的研究活動の中心で、若手研究者が1955年にタイ調査を実施する計画を立てていた。しかし、1955年にカラコルム・ヒンズークシ学術探検隊が実施されることになり、計画が取りやめになった。しかし、継続して調査実現のための現地交渉は続けており、現地受け入れのチュラロンコン大学から1957年11月にタイのバンコックで太平洋学術会議が開かれて大阪市立大学生物学教室の6人が出席し、その機会を利用して調査をすることでタイ側の協力を得ることになったことで実現した。彼らは三菱重工業からジープ3台を提供してもらい、研究資材を車に積み込んで東南アジアを回った(梅棹1989b:57-58)。この時、バンコックの日本大使館にいた石井米雄も参加している。

はたして田口が指摘するように、梅棹には稲作調査団への対抗意識があったのだろうか。梅棹の紀行文では、日本から持ち込んだ自動車の通関手続きが、稲作調査団の場合と比べて滞りなくできた点(梅棹1989b:45)、調査途中で稲作調査団に参加していた岩田慶治と出会ったくらいの記述で(梅棹1989b:122)、ほかは全く出てこない。大阪市立大学の東南アジア調査団は、第2回の調査団の隊長に第一次稲作調査へ参加した岩田慶治がつとめており、最終的に1957年から63年の間に5回の学術調査団を派遣している。研究分野は地質学・古生物学・森林生態学・栽培植物学・霊長類学・昆虫学・文化人類学にわたり、参加者は25名、延べ750日の調査に達している(大阪市立大学東南アジア学術調査委員会1964:1)。大阪市立大学の東南アジアの調査は、単発的な調査ではなく、調査に継続性を持たせて展開し、かつ最終的に英文の報告書を出版している⁶。一つの大学がプロジェクトとして海外遠征を実施することで、継続性が見られ、逆に東南アジア稲作調査団の研究が単発的な調査だったように見える。それゆえ、田口が指摘するような対抗心があったようには思えない。

第3章 照葉樹林文化論

第三次調査中部ネパールの低地と高地の調査では、川喜田二郎(団長)、佐々木高明、山田隆治、杉山晃一の4名が正規のメンバーで、そのほか短期参加1人、ネパール班に毎日放送映画株式会社から2名のカメラマンが学術映画の取材で同行した。1963年6月に出発し、ネパール班の川喜田・佐々木、インド班の山田、杉山に分かれて調査を行った。

団長の川喜田二郎は、梅棹忠雄と中学時代から同級生で、同じ山岳部に入り、京都帝国大学文学部で地理学を専攻し、今西に師事してボナベ調査、大興安嶺探検に参加している。戦後は1953年に第一次マナスル登山隊科学班に中尾佐助とともに参加し、その紀行

は『ネパール王国探検記』としてまとめられた。後にKJ法と呼ばれる、川喜田の独特な情報整理法の原型ができたといわれる。1958年に西北ネパール学術探検隊を組織して隊長を務め、その体験は『鳥葬の国』としてまとめられた(川喜田 1998:311-314)。

1963年の第三次東南アジア稲作民族文化総合調査団は、この2回の調査旅行を基礎に調査地を選定した。そこは、北インドの水田地帯の北限であるヒンズー文化の強いGhara村と、その隣村で200メートル離れたマガル(Magar)族のSikha村で、ヒンズー文化ではない畑作中心の村の比較であった。調査は、当初二人でSikha村を調査した後、川喜田はそこに残って継続調査をし、佐々木はGhara村を担当した(第三次調査団 1964:82)。

川喜田は、この時の調査資料でThe Hill Magars and their Neighbors (Kawakita Jirō 1974)を書いている。その章立ては次の通り。

- 1章 マガル族における三圃制とその意味
 - 2章 牧畜の伝統
 - 3章 住民は土地利用で最大限の酬いを得べく奮闘している
 - 4章 諸民族・諸カースト・諸氏族の構成と分布
 - 5章 分業
 - 6章 文化相と文化領域が絶えず累積・進展している
 - 7章 歴史的に見た文化領域の垂直構造
 - 8章 ヒンズー化に対するマガル族の抵抗
 - 9章 権威主義か自由か—マガル族の家族生活
 - 10章 ブーメ信仰のパンテオン
 - 11章 宗教—過去と現在
 - 12章 近年に加速された文化変化
- 結論に代えて

川喜田は、この英文の元になった報告を日本語で発表している。まず「素朴文化とヒンズー文化を別つもの：マガル族の場合」では、マガル族の村を低地からのヒンズー化＝カースト化を表面的であり、ヒンズー化への抵抗と捉えている。その要因を、山地部の厳しい労働環境に求め、男・女・コドモ別の分業は、山地民が採用しにくく、ヒンズー的な男女間の隔離が難しくなると分析している。「中部ネパールヒマラヤにおける諸文化の垂直構造」は、5回のネパール調査をまとめたものだが、具体例として、マガル族の事例は重要な資料になっている。「マガル族の物語：神話と伝説の旅」では、1953年と58年の調査資料も参照されているが、マガル族の記述が中心である。「マガル族の文化変化と『山』」は、英文の報告には入れてないが、山岳的環境に即する文化変化を取り上げている。

川喜田は卓越したエッセストとして、そしてKJ法という情報管理のエキスパートとして知られているが、一つの集落に集中して調査をしているのは、稲作文化調査の時のマ

ガール族であり、まとまった研究書として公刊されているのは、この英文の民族誌だけなので、この時の調査が重要であったことがわかる。

川喜田と共同調査をした佐々木高明については後述することにして、インド班の杉山晃一と山田隆治は、1963年7月上旬ビーハール州南部のランチ地区に赴き、ムンダ族に関する集約的村落調査の選定を始め、杉山晃一は同年8月にフント村に赴き翌年2月末まで滞在した。山田隆治も同年8月にタルブ村へ赴き12月まで滞在した。12月にネパールから来た佐々木と共同して、翌年2月までサンタル・バルガナス地区のラジマハール高原で焼畑を営むパーリア族を調査して焼畑農耕の技術面と、それに結び付く儀礼的側面を調査した(第三次調査団 1964:84)。その成果は、川喜田二郎編集で、次の3冊の英文報告書となっている。

- Synthetic Research of the Culture of Rice-cultivating Peoples in Southeast Asian Countries. 3 Vols
 Vol. 1: Cultural Formation of the Mundas: Hill Peoples Surrounding the Ganges Plain
 Vol. 2: A Study of the Mundas Village Life in India
 Vol. 3: The Hill Magars and their Neighbours

杉山晃一は、その後は韓国にフィールドを拡大しているが、稲作についてもその後に『稲のまつり：アジアの村々を訪ねて』(杉山 1996)をまとめている。山田隆治も、この時の調査を『ムンダ族の農耕文化複合』(山田 1969)として出版し、英語版を翌年に出版している(山田 1970)。

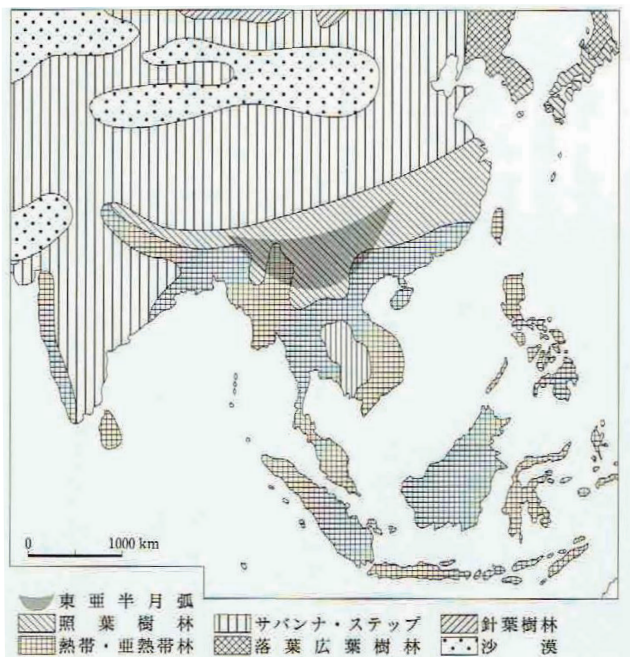
佐々木高明は、この調査を終えて、この後で述べる中尾佐助とともに照葉樹林文化論を文化人類学の分野で唱え、1970年代から80年代にかけて影響力を持った。特に日本における東南アジア、及び中国西南部の少数民族調査の研究の枠組みに大きな影響を与えた。この東南アジア稲作文化調査団には参加していないが、照葉樹林文化論を最初に唱えた中尾佐助は、その後、その枠組みを継承発展させた佐々木高明の研究に結び付くので、ここで論じることとする。

中尾佐助は、戦前から今西錦司・梅棹忠雄とともに京都帝国大学旅行部に所属して、樺太、ポナベ島、小興安嶺、内蒙古と探検調査の経験を積んでおり、戦後も1952年、53年と日本山岳会マナスル踏査隊に参加して中部ネパールに滞在したことがあり、1955年の京都大学カラコルム・ヒンズークシ探検隊に参加してパキスタンに半年余り滞在し、1958年にはブータン、59年にはシッキム、アッサム、1962年には大阪府立大学東北ネパール学術調査隊に参加して東ネパールに行った経験のある、いわば海外調査のエキスパートだった(佐々木 2004:566-567)。特に1958年のブータン滞在を記録した紀行文『秘境ブータン』を執筆しており、そこでのフィールドワークから照葉樹林文化を着想した。1961年に執筆した「農業起源論」は、その概要を『栽培植物と農耕の起源』(1966年)として先に出版した。この本で最初に照葉樹林文化論を唱え、大きな反響を呼んだ。これは、ヒマラヤの南麓からアッサム、東南アジア北部の高地、雲南高地、中国揚子江流域を

経て、日本の西南部に至る東アジアの暖温帯にある照葉樹林帯が、木の実の水さらし技術であるとか、絹を作る技術、樹液から漆器を作る技法、茶樹の葉を加工して飲用する慣行など、多くの共通した文化要素を持つことを指摘した。

この仮説の反響は関連する諸分野の専門家によって討論会が組織されるほど大きなものであった。実際この仮説は、そこでの議論によって示された新しい知見を採り入れ、理論的に修正・更新されていった。最初の討論をまとめた上山春平編『照葉樹林文化—日本文化の深層』(上山編 1969)は、生態学の吉良竜夫、考古学の岡崎敬、民族学の岩田慶治が討論に加わり、中尾は照葉樹林文化が雑穀類を主作物とする焼畑に基礎を置く「照葉樹林文化複合」とそれ以前の「前期複合」にあることが提案された。つぎに、より専門的レベルで討論したのが『続・照葉樹林文化—東アジア文化の源流』(上山・佐々木・中尾 1976)で、新たな研究蓄積をもとに、中尾は照葉樹林文化が「根栽農耕文化の北方(温帯)展開型」という従来の考えを変更し、北方から南方への文化の影響が大きかったとする新たな考えを提起した。しかし参加者からの反論で、半ば撤回したが、照葉樹林文化で根栽文化の影響が大きいことがわかり、照葉樹林文化の発展段階も変更が加えられた。

そして、照葉樹林文化を構成する文化要素の分布を重ね合わせ、照葉樹林文化のセンターを仮に設定し、雲南高地を中心に西はインドのアッサムから東は中国の湖南省に至る半月形の地域を、西アジアの「肥沃な半月地帯」の壟に倣い「東亜半月弧」と命名した。また照葉樹林文化を構成する文化要素として、従来のものに加えて、新たに味噌や納豆のような大豆の発酵食品、コンニャクなどの特殊な食品、ハンギング・ウォールの家や鶉飼いの諸要素、さらに歌垣の慣行や十五夜とイモ祭りの習俗、焼畑の開始期に行われる儀礼的共同狩猟の慣行、オオゲツヒメ型の死体化生神話や山上他界の慣行、習俗や儀礼、神話などの諸要素も付け加えられた(佐々木 2006: 771-773)。



図表2 東・南アジアの植生と東亜半月弧
 出典『中尾佐助著作集 第VI巻』10ページ。

佐々木高明が考える照葉樹林文化論は、『稲作以前』(1971年)で論じられたが、日本の生活文化の基盤をなす要素が、中国雲南省を中心に東南アジアから東アジア一帯に分布するとする理論仮説を唱えていた(図表2)。『続・照葉樹林文化』の議論で、中尾も照葉樹林文化論が、農業技術だけでなく社会の文化的要素も対象に取めたので、佐々木高明は70年代から80年代にかけて中尾と共同研究を組織して、照葉樹林文化が「未完の大仮説」として常に変更が加えられた⁷。

1982年からの国立民族学博物館による、大規模な西南中国の少数民族調査プロジェクトが実施されたが、これは中尾・佐々木が唱える照葉樹林文化論の文化的要素を実証するために企画されたもので、中国が対外開放政策を取って、かなり早い時期に海外の研究者へ中国少数民族地帯でのフィールドワークを許可した最初のケースだった⁸。

第4章 京都学派の海外調査

第1節 京都大学のヒマラヤ登山

京都大学の海外調査は、今西錦司の強力なリーダーシップの下で、戦前から培われた計画が戦後に実現できたといえる。冒頭でも述べたように、ヒマラヤに行くため1931年にAACKというクラブを組織し、極地法という登山の訓練をしながら遠征資金を集めていた。しかし1932年の満州事変でカブール遠征計画は中止となった。そこで南樺太の山、

及び冬期白頭山遠征を実施したが、1936年、ふたたびヒマラヤ計画を立て、K2を目標にした。この時、実際にインドに登山の下調べや許可証の申請までしていたが、やはり盧溝橋事変で中止となった。そこで1938年夏に木原均隊長の学術調査隊と鈴木信隊長の学生隊がモンゴルへ向かい、『内蒙古の生物学的調査』（木原編 1940）と紀行文『蒙古横断』（宮崎 1943年）を出版した。

こうして登山から探検へ目標を変え、1939年あらたに京都探検地理学会が発足し、梅棹忠雄・吉良竜夫・藤田和夫・川喜田二郎が、三高校山岳部、京都帝国大学を経て今西錦司をリーダーに1941年のボナベ島遠征、1942年に大興安嶺探検、1944年の西北研究所の冬期モンゴル草原調査を実施した（今西編 1988：66-136）。戦後のヒマラヤ登山隊メンバーは、1942年の大興安嶺探検のメンバーとかなり重複しており、報告書の形式も似ている。さらに重要なことは、ヒマラヤ登山は、AACKをリードした今西錦司の戦前からの念願であり、1930年代からヒマラヤ登山のための訓練として、今西は、梅棹忠夫をはじめとする京都大学の学生たちを南樺太の登山に連れて行っていた。また1944年に張家口に設置された西北研究所に所長として赴任した時も、チベット側からヒマラヤ登山ができないかと真剣に考えていた。この計画が、戦後実現することになる。

今西錦司は、戦後中国から引き揚げてしばらく日本国内で研究をしていたが、1951年に海外渡航が解禁される頃合いを見て、海外調査を計画している。これも1949年にネパールが登山に門戸を開き始め、スイス、イギリス、フランスがヒマラヤ登山を再開していた。そして農学部の教授だった木原均を代表者に計画を立てた。木原は、小麦の細胞遺伝学的研究で日本学士院から恩賜賞を受け、当時湯川秀樹と並んで京都大学を代表する学者だった。1948年に文化勲章も受け、その年ストックホルムで開催された国際遺伝学会に招待されていた。彼が中心となって、京都大学もヒマラヤ登山を計画し、1952年カルカッタで開催されるインド科学会議に木原が招待されていることを利用し、白頭山遠征にも参加したことがある西堀栄三郎に交渉をゆだねて、登山許可を取った。この時、学術探検を前に出すより登山を掲げたほうが許可をとれそうだという判断もあった。またヒマラヤ遠征の主体も日本山岳会になり、マナスル踏破隊が組織され、AACKからは科学班で中尾佐助と川喜田二郎が入った。中尾と川喜田の仕事は、すでに照葉樹林文化論のところで言及したが、彼らのネパール、ブータン経験は、このマナスル隊科学班から始まった（今西編 1988：138-191、今西 1994：472-476）。

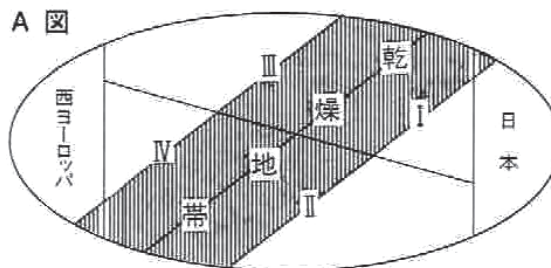
マナスル1次隊には科学班があったが、2次隊にはなかったため、京都大学では独自に「西ネパール学術探検計画案」を立ち上げ、国費と朝日新聞の資金協力で、1955年に木原均を隊長とする京都大学カラコルム・ヒンズークシ学術探検隊を派遣した。この探検隊は、生物学、地質学、考古学、人類学、言語学の総合調査であった。アフガニスタン・イランを調査する本隊とカラコラムにはいる支隊とにわかれ、各地域の地質・植物・動物・文化を調査した。この時の研究成果は、京都大学生物誌研究会の名前でScientific Results of the Japanese Expedition to Nepal Himalayaとして1955年から57年まで毎年1巻ずつ刊行

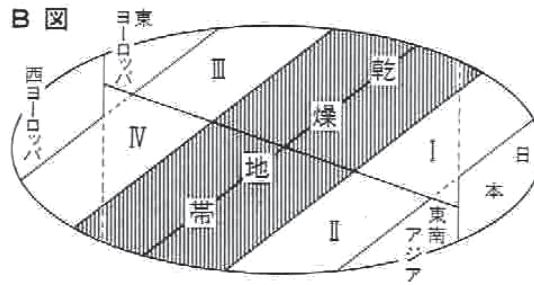
され、1 Fauna and Flora of Nepal Himalaya 2 Land and Crops of Nepal Himalaya 3 People of Nepal Himalaya の3部作が出版され、最終的に全8巻の報告書となった。

1956年には、パキスタンのパンジャブ大学との合同学生探検隊が組織され、カラコラム西側に隣接するヒンズークシ地域にはいった。57年には、さらに西部のスワート地域にも合同探検隊が送られ、55年から57年にかけての調査地域は地理的に統合されることとなった⁹。この時の成果報告が木原均編『『砂漠と氷河の探検』(1956)と今西錦司の『カラコラム：探検の記録』(1956)である。

また1954年に、岩村忍はアフガニスタンを訪れた。この地域に残るモンゴル語の痕跡を求めて、モゴール族を探した。かつてフィンランドの言語学者、ラムステットは、ロシア領内のアフガニスタン国境近くで、モゴール族と称する民族のモンゴル語系言語を収集して、1906年に発表して世界を驚かせた。モンゴルを研究していた岩村忍は、そのモゴール族を求めて調査に赴き、『アフガニスタン紀行：モゴール族の村を求めて』(1955)として報告書を出版した。最終的に、ヘラート近くでモゴール族の集落を見つけたが、そこは移住地であったので、モゴール族の原住地の調査は翌年にもちこされた。1955年、岩村忍を隊長に、山崎忠が言語学、岡崎敬は考古学、梅棹忠夫は人類学の分担で調査団を結成し、モゴール族調査をした。この時の調査は梅棹忠夫の『モゴール族探検記』(1966)が紀行文にまとめている。

その後、梅棹は、ゴラート地方で知り合った二人のアメリカ人、シュルマン博士とランダウアー氏とともに、自動車ですインド亜大陸横断旅行をした。この横断旅行で、梅棹はイスラム文明とヒンドゥー文明の二つの巨大文明に接し、ヨーロッパでもアジアでもない「中洋」という概念を着想した。帰国後、梅棹はユーラシア大陸全体の生態学的構造を日本と西ヨーロッパが文明における平行現象としてとらえる「文明の生態史観」(図表3)という地球規模の文明論を公表し、注目を集めた(梅棹 2002:115-117)。その後、梅棹は前述した東南アジア調査の経験を通じて、さらにその図式を修正して文明論を展開した。





図表3 梅棹忠夫の文明の生態史観

出典 梅棹忠夫『梅棹忠雄著作集 第5巻 比較文明学研究』136、142 ページ。

第2節 アフリカ研究

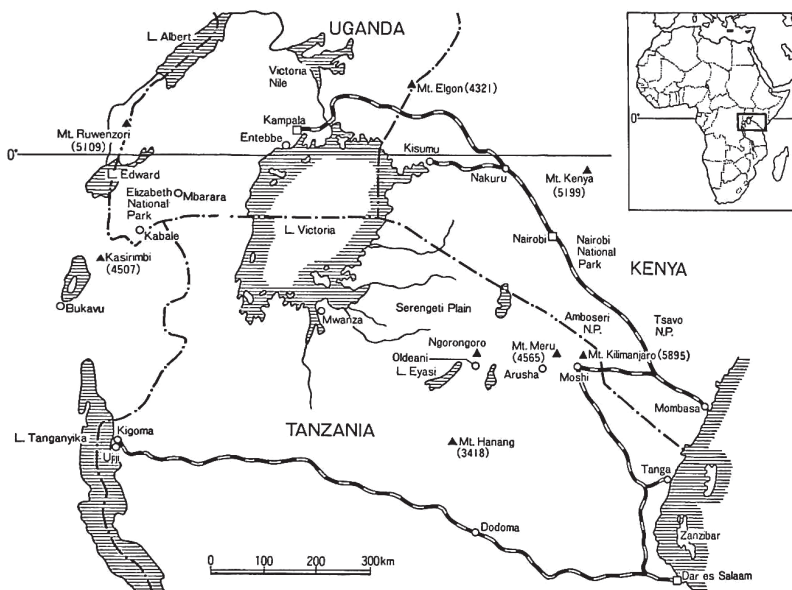
京都大学は、この海外遠征に続けて、1963年1月から64年3月のアフリカ調査にでかけている。この結果は『京都大学アフリカ学術調査隊中間報告』にまとめられているが、類人猿班と人類班に分かれ、日本で始めた猿の研究をアフリカに広げた。そこで伝統的な人類学とに分担してコンゴのタンガニカ湖東岸で調査を始め、現在の京都大学のアフリカ学の先鞭をつけている。

筆者は、以前、梅棹忠夫本人から直接聞いたのだが、1944年の秋から1945年の春まで調査をした冬のモンゴル草原の経験から、世界地図を広げ、モンゴルに似たステップ地帯を探し、アフリカに広がるステップ地帯に調査地を決めたのだという。つまり、京都大学のアフリカ学術調査隊も、今西や梅棹の戦前に調査したモンゴル経験の延長線上にある。

今西錦司は、アフリカ研究の動機を、類人猿調査の計画として説明している。京都大学の10年にわたるアフリカ調査をまとめた『アフリカ社会の研究：京都大学アフリカ学術調査隊報告』（今西・梅棹編 1968）の冒頭で、今西は「アフリカ研究序説」を書いている。ここで今西は、戦前に計画を立てたボルネオの学術調査の目的に、オランウータンの野外調査が含まれていたと述べている。戦後、今西はニホンザルの研究をしているが、類人猿に関する関心は戦前から始まっており、文献研究から類人猿のゴリラ、チンパンジー、テナガザルの研究は着手されており、オランウータンだけが誰も本格的調査をしていないことに着目して、今西のパイオニア精神から調査を試みたいと思っていた。しかし戦争によって計画は実現せず、西北研究所で蒙古草原の遊牧民研究をしていた。それも終戦によって研究ができなくなったので、蒙古に似た遊牧民の世界であるアフリカへと向かい、1958年に実現したという。この時、共同研究した伊谷純一郎が類人猿調査を目的にしており、戦前のボルネオ調査計画の延長にあると書いている（今西 1968：21）。

今西は、戦後中国から引き揚げて京都大学人文科学研究所にいたときに、宮崎県の幸島でサルの研究をはじめており、1955年にカラコルムへ行った年の秋に、名古屋鉄道の人たちからサルの施設を作る相談を受け、逆に今西から愛知県犬山市に作ることを提案して

受諾されたので、財団法人とするための交渉を文部省としていた。この計画は、世界中のサルを一か所に集める計画で1956年に日本モンキーセンターを設立した。1958年2月に伊谷純一郎とアフリカへ行ったのは、欧米の動物園のサル類の収集と管理の実情調査と、余分なサルの交換であったが、この機会を利用してアフリカでゴリラの予備調査をしようとしたのだった(今西 1994:479-482)。当初、アフリカ類人猿の調査団は日本モンキーセンターがスポンサーだったが、1961年からは京都大学に移管し、その時期コンゴで内戦がおこってゴリラ調査が難しくなったので、タンザニアのチンパンジーに研究対象を変更した。チンパンジーはサバンナへ生活圏を拡大した動物なので、京都大学もサバンナに住む採取狩猟民、牧畜民を比較研究対象にした。そこで1961年からは、類人猿班と人類班の2つになった。類人猿班はタンガニイカ湖近くのカボゴ基地、人類班はエヤシ湖畔のマンゴーラにエヤシ基地を作って、前者はチンパンジー、後者は採取狩猟民のハツァピ族と牧畜民のダトーガ族を調査対象に選んだ(図表4)。



図表4 京都大学アフリカ学術調査隊の対象地域

今西の整理によると、サバンナに住むチンパンジーの研究は、人類の進化をひもとくヒントになると期待して進められ、ニホンザル研究で成果を上げた餌づけを採用することにした。当初、ゴリラやチンパンジーは、オスとメスとその子らからなる類家族、あるいはファミロイドの仮説を立てたが、否定的な資料が多く、1966年になると伊谷の提唱するプレバンド (preband) という30-40頭の大型集団が、子連れのみ、大人のオス、発情したメスを含む子づれでないメスというように全体が秩序ある集団としてまとまりをもつ

ていることがわかってきた。近隣関係を持ったプレバンドにより地域社会が形成されると仮定し、そのために個体識別を実現するための餌づけをしようとした。しかし、7年間実施してみて、結果は思うようにはいかず、継続調査となった(今西 1968:22-23)。

これに対して、人類班が基地を作ったマンゴースは、採取狩猟民のハツァピ族と牧畜民のダトーガ族以外に、半農半牧のイラク族、バンツ系の開拓民もいて、生活様式を異にする4部族が共存する地域で、ここでの調査は順調に行われた。

『アフリカ社会の研究』の構成から、全体の分担が明らかになっている。

- I 回顧と展望(今西錦司、梅棹忠夫)
- II マンゴース地域社会(田中荘一、石毛直道)
- III 狩猟採集民の社会(富田浩造、藤岡喜愛)
- IV 牧畜民の社会(富川盛道、梅棹忠夫)
- V 農耕民の社会(和崎洋一、石毛直道)
- VI 半農半牧民の社会(米山俊直)
- VII ハナン地域社会(福井勝義、和田正平)
- VIII タンガニイカ湖岸の村と都市(端信行、日野舜也)
- IX 交友と生活の記録(谷口穰、吉村淳)
- X 医学からみたアフリカ(高木隆郎、林薫、浅井東一)

今西は、社会人類学の研究に対して、次のように新しい課題を提起している。例えば牧畜と農耕の価値体系の違いからくる分離対立は、部族レベルの社会を前提にする限り統合は難しいが、部族を超えた国民として再編成され、国家レベルの社会に統合されねばならない。そこで以前は一つ一つの部族の歴史や文化を研究すればよかったが、今後は歴史も文化も違ういくつかの部族が、いかに統合を遂げていくかを研究すべきで、部族レベルと国家レベルの双方の立場から研究すべきである。そして多部族社会の形成という点で、都市社会も研究すべきだ、と提言している。

今西の提言は、それまでの研究が一部族に集中して民族誌を作る方法だったので、部族間の比較研究は少なかったことを踏まえている。さらに、調査地が調査開始から20年ほどでスワヒリ語が著しく普及し、異部族間での共通語となったことで、比較研究が容易になったことも、こうした発想の基礎となっている(今西 1968:25)。

アフリカで都市化が急速に進み、「都市人類学」という分野が成立したのは、京都学派がアフリカでフィールドワークをしていた時期と重なる。アフリカでの日本人の都市人類学研究が1960年代から始まったのは、今西の示した調査方針が深く影響している。また、福井勝義が京都大学のアフリカ研究の特色として指摘しているのは、マンゴース研究が家畜と人間関係を中心とする牧畜社会の研究を中心に据えており、この視角が欧米の研究者からはユニークなアプローチだったと指摘している(福井1986:270)。この理論こそ、

梅棹忠雄が戦時中の西北研究所にいた時代、冬の蒙古草原遠征で創出した遊牧論が起点になっていた(中生 2016:420-429)。この仮説をアフリカに応用したことで、京都学派のアフリカ研究は、国際的にインパクトを与えた。

チンパンジーの研究をしていた伊谷純一郎は、その調査地で掛谷誠と焼畑耕作農民であったトングウェ族の自然とのかかわりに関する資料を集め、1972年にはザイルのムブティ・ピグミーの調査を始め、原子令三・丹野正・市川光雄が詳細な報告をまとめた。1962年には富川盛道・富田浩三がタンザニア中北部のハッザ(ティンディガ)族を手掛け、1966年には田中二郎がカラハリのブッシュマンの研究をスタートさせ、1977年には寺嶋秀明がタンガニイカ湖西岸の乾燥疎開林帯の狩猟民バンボテ、市川光雄がケニヤ中北部の狩猟民ドロボの研究を始め、アフリカの採取狩猟民は、ほとんど京都大学のグループで調査をするようになった(伊谷 1980:10)。1986年には、日本で初めてのアフリカ地域センターを創設し、1958年から1987年の30年間で延べ500人以上の研究者が、主として霊長類(とくに大型類人猿)の生態学的・社会学的研究や、狩猟採集民・牧畜民・焼畑農耕民の生態人類学的研究、化石人類の研究、淡水魚の生態学的研究、在来農業の研究等の分野で業績を上げる、世界的な研究拠点に発展した¹⁰。

1959年には、水野清一団長で第一次京都大学イラン、アフガニスタン、パキスタン學術調査隊を実施し、考古美術、地理、歴史言語、人類の共同調査が行われた。この成果は『文明の十字路』(1962)にまとめられたが、その後水野清一を団長とする調査団は、第2回以降京都大学イ・ア・パ調査として考古班のみを編成し、1967年まで7回派遣され(貝塚・日比野編 1973:172-173)、1983年から1992年まではガンダーラ仏教遺跡の総合調査へと発展的に継承されている。

水野の業績として興味深いのは、戦前と戦後の研究が連続していることである。水野の研究は、1933年の東亜考古学主催の東京城(渤海国郡龍泉府址)発掘にはじまり、熱河、赤峰紅山の発掘、1942年の東方文化学院京都研究所から派遣されて南北響堂山と龍門の石窟、輯安(通溝)の高句麗遺蹟を調査し、華北で雲岡石窟の予備調査を行った。1938年の第1回雲岡石窟調査以来、毎年3か月近く調査をおこない、1944年まで7回の調査を実施した¹¹。戦後の1951年に『雲岡』1巻、2巻が出版され、戦前の成果は朝日賞、日本学士院より恩賜賞を受賞し、高い評価を得た(貝塚・日比野編 1973:170-171)。その後、水野清一・長廣敏雄『雲岡石窟』全16巻32冊(1951-56年)としてまとめられた¹²。

戦後の京都大学イ・ア・パ調査での報告書の形式が、戦前に行われた雲岡石窟調査とまったく同じである。これはシルクロードの東側を戦前に、西側を戦後に調査したに過ぎず、シルクロードの仏教遺跡調査という一貫した研究テーマで戦前から戦後にかけて、連続した研究が行われていたことを示している。

注

- 1 この東亜煙草は、アヘンを取り扱う会社であり、昭南通商は、陸軍の古い武器を払い下げてもらい、世界の紛争地にその武器を販売する国策会社であった。
- 2 泉靖一が発見したアイヌの *iwor* については、必ずしもアイヌ固有ではなく、泉が1930年代に満洲で調査をしていたオロチョン族の狩猟圏をイメージして、その類似からの着想だと思われる。
- 3 馬淵は、戦前に満鉄東亜研究所でインドネシアの文献調査をしていたので、インドネシア調査にはぜひとも参加したかったのであろう。さらに馬淵を立腹させたのは、その団長が宮本延人だったことだろう。宮本は、戦前台北帝国大学の助教授で、助手の馬淵の上司にあっていたが、『高砂族系統所属の研究』では、宮本がフィールド調査のできないことは周知していたことであり、この研究で馬淵が8割近くを調査執筆していたことから、馬淵としては納得できなかったと思う。そのためか、宮本が第二次東南アジア稲作民族文化総合調査報告のまえがきで、わざわざ「調査計画については都立大学教授馬淵東一氏の熱心な後援を得」と言及しており、その対処のうしろめたさを読み取れる。
- 4 岩田は、「種族」と「部族」を分けている。前者の「種族」として黒タイ族、赤タイ族、タイ・ヌーア族、タイ・ブータン族を挙げており、エスニシティを示しているが、後者の「部族」は、「地方社会」に対比して用いており、エスニシティの差異を強調するのではなく、そうした社会を包括的に表現するための用語と思われる。
- 5 梅棹忠夫の『東南アジア紀行』のなかで、東南アジア稲作文化総合調査団について触れているのは、外貨割り当てのところだけである。この調査団が、文部省から助成金を得て、すでに外貨割り当てをうけていたので、大蔵省が替管理局から調査内容が似たものに二重の許可を出せないと断られ、最終的に1日4ドル100日分という当初計画の4分の1の金額で妥協せざるを得なかった(梅棹1989b: 63)。
- 6 1回から3回までの詳細は冊子にまとめられている(大阪市立大学東南アジア学術調査委員会1964)。
- 7 照葉樹林文化論は、壮大な理論仮説であるだけに、考古学や植物学、生態学の新たな研究の進展により、絶えず理論が組み替えられ、時にそれまでの枠組みが変更されている。そのプロセスについての概観は、石井が全体をまとめている(石井1984)。理論仮説であるだけに批判もあるが、池田宏は『稲作の起源』で、中尾の照葉樹林文化論の「初期」の理論仮説を批判している。これに対して山口裕文は、絶えず更新を続けた照葉樹林文化論への批判が、不当であるばかりか、批判した中尾の文章も引用を誤っており、事実無根の非難だと厳しく反論している(山口2008)。
- 8 調査団の正式名称は「日本・国立民族学博物館中国西南部少数民族文化考察団」で、1982年10月19日から12月10日まで北京経由で雲南省西双版纳・景洪、広西壮族自治区と短期調査だった(高橋1984)。
- 9 「動き続ける大陸—京都大学カラコラム・ヒンズークシ探検」<http://exhibit.rra.museum.kyoto-u.ac.jp/karakoram/story/index.html>。
- 10 「アフリカセンターのあゆみ」『京都大学アフリカ地域研究資料センター』<https://jambo.africa.kyoto-u.ac.jp/history.html>。
- 11 調査の経緯は、共同研究者である長廣敏雄の日記によって公表されている(長廣1988)。
- 12 京都大学人文科学研究所では、水野の残した瓦や土器・陶磁器などの出土資料を整理し、1936～1938年に撮影された中国調査映画や、『雲岡石窟』の補遺をふくむ全16巻33冊と水野清一・長廣敏雄『龍門石窟の研究』・『響堂山石窟』のPDFを京都大学学術情報リポジトリ「紅」に公開している。村岡秀典「運航石窟の研究」京都大学人文科学研究所 <http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/kyodokenkyu/research35.htm>。

参考文献

- 浅井恵倫他 1959a「東南アジア稲作民族文化総合調査：座談会（その1）」『民族学研究』22巻3-4号、245-268。
 1959b「東南アジア稲作民族文化総合調査座談会（その2）」『民族学研究』23巻1-2号、118-130。
- 綾部恒雄 1962『タイおよびラオスの村落生活：San Pa Tun（タイ）とPha Khao（ラオス）比較上の覚書』（第一次東南アジア稲作民族文化総合調査団報告, no.2）東京：日本民族学協会。
 1965「タイおよびラオスの村落生活—サンパトン（タイ）とパカオ（ラオス）比較上の覚書」松本信広編『インドシナ研究—東南アジア稲作民族文化総合調査報告（1）』東京：有隣堂、389-504。
- 飯田卓 2007「昭和30年代の海外学術エクステンション：「日本の人類学」の戦後とマスメディア」『国立民族学博物館報告』31号、217-285。
- 池橋宏 2005『稲作の起源』東京：講談社
- 石井溥 1984「照葉樹林文化」『民族学研究』49巻3号、273-280。
- 石田英一郎 1952「沙流アイヌの共同調査報告について」『民族学研究』16巻3・4号、186。
- 伊谷純一郎 1980『トゥルカナの自然誌：呵責なき人びと』東京：雄山社
- 今西錦司 1956『カラコラム：探検の記録』東京：文芸春秋新社
- 今西錦司編 1988『ヒマラヤへの道：京都大学学士山岳会の五十年』東京：中央公論社
- 今西錦司・梅棹忠雄編 1968『アフリカ社会の研究：京都大学アフリカ学術調査隊報告』東京：西村書店
- 伊藤幹治 1988「日本の文化人類学の歩み」伊藤幹治・米山俊直編『文化人類学へのアプローチ』東京：ミネルヴァ書房、291-299。
- 岩田慶治 1960a「北部ラオスの少数民族：特にヤオ族に関して」『史林』43巻1号、70-103。
 1960b「ボロヴェン高原の人文地理」『人文研究』11巻2号、46-70。
 1964「インドシナ半島北部におけるタイ諸族の家族と親族：タイ・ヤイ族、タイ・ヌア族、タイ・ルー族社会の比較」『民族学研究』29巻1号、1-31。
 1965「パ・タン村：北部ラオスにおける村落社会の構造」松本信弘編『インドシナ研究—東南アジア稲作民族文化総合調査報告（1）』東京：有隣堂、269-387。
 1983「岡正雄先生と東南アジア研究」『民族学研究』4巻1号、20-21。
 1995『日本文化の源流 岩田慶治著作集1』東京：講談社
- 岩村忍 1980(1955)『アフガニスタン紀行 モゴール族の村を求めて』東京：朝日新聞社
- 上山春平・佐々木高明・中尾佐助 1976『東アジア文化の源流』東京：中央公論社
- 上山春平編 1969『照葉樹林文化—日本文化の深層』東京：中央公論社
- 梅棹忠夫 1989a『梅棹忠雄著作集 第5巻 比較文明学研究』東京：中央公論社
 1989b『梅棹忠雄著作集 第6巻 アジアをみる目』東京：中央公論社
 1990『梅棹忠雄著作集 第8巻 アフリカ研究』東京：中央公論社
 2002『行為と妄想：わたしの履歴書』東京：中央公論社
- 梅棹忠夫・栗田靖之（聞き手・構成 飯田卓）2007「学会活動と映像マスメディア」『国立民族学博物館研究報告』31巻2号、286-300。
- 大阪市立大学東南アジア学術調査委員会 1964『東南アジア研究の7年：大阪市立大学東南アジア学術調査隊中間報告1957.11～1964.4』大阪：大阪市立大学東南アジア学術調査委員会
- 岡正雄 1981「岡正雄氏談話」渋沢敬三伝記編纂刊行会『渋沢敬三 下』私家版、664-689。
- 岡正雄ほか 1958『日本民族の起源：対談と討論』東京：平凡社
- 川喜田二郎 1974, *The Hill Magars and their Neighbours: Synthetic Research of the Culture of Rice-cultivating Peoples in Southeast Asian Countries* III Tokai University Press

- 1997 『川喜田二郎著作集 10 卷 ヒマラヤの文化生態学』 東京：中央公論社
- 1998 『川喜田二郎著作集別巻 私の人生論・年譜・著作目録・総索引』 東京：中央公論社
- 木原均編 1940 『内蒙古の生物学的調査』 東京：養賢堂
- 1956 『砂漠と氷河の探検』 東京：朝日新聞社
- クラックホーン、クライド (光延明洋訳) 1971 『人間のための鏡』 東京：サイマル出版会 (Clyde Kluckhohn, *Mirror for man*, McGraw-Hill, 1949)
- 佐々木高明 1971 『稲作以前』 東京：NHK 出版
- 1982 『照葉樹林文化の道：ブータン・雲南から日本へ』 東京：日本放送出版協会
- 2001 「根栽農耕文化と雑穀農耕文化の発見：照葉樹林文化論を生み出した「農耕起源論」の枠組み」金子務・山口裕文編著『照葉樹林文化論の現代的展開』札幌：北海道大学図書刊行会
- 2006 「解説 照葉樹林文化論：中尾佐助の未完の大仮説」中尾佐助『中尾佐助著作集 VI 巻照葉樹林文化論』札幌：北海道大学図書刊行会
- 2007 『照葉樹林文化とは何か』 東京：中央公論社
- 佐々木高明編著 1984 『雲南の照葉樹のもとで：国立民族学博物館中国西南部少数民族文化学術調査団報告』 東京：日本放送出版協会
- 第3次調査団 1964 「第3次東南アジア稲作民族文化調査について」『民族学研究』29 卷1号、82-85。
- 杉山晃一 1969, *A Study of the Mundās Village Life in India, Hill Peoples Surrounding the Ganges Plain / Synthetic Research of the Culture of Rice-cultivating Peoples in Southeast Asian Countries*, III ; edited by Kawakita Jirō, v. 2) Tokai University Press
- 1996 『稲のまつり：アジアの村々を訪ねて』 京都：平楽寺書店
- 高橋徹 1984 「雲南の赤い米－西南中国の少数民族を訪ねて」佐々木高明編著『雲南の照葉樹のもとで：国立民族学博物館中国西南部少数民族文化学術調査団報告』 東京：日本放送出版協会、273-327。
- 田口理恵 2004 「博物館コレクションをコレクションする－モノ研究からみたメコン流域地域収集の民族資料の可能性－」『Asian Studies Watching 論集～アジア学の最前線』（アジア 研究情報 Gateway、東京大学東洋文化研究所 <https://ricas.ioc.u-tokyo.ac.jp/asj/html/017.html>。
- 2010 「東南アジア稲作民族文化総合調査団の資料と活用にむけた模索」<http://icfcs.kanagawa-u.ac.jp/research/group8/ovubsq00000030zv-att/mtls.pdf>。
- 田中雅一 2011 「探検と共同研究：京都大学を中心とする文化人類学」山路勝彦編『日本の人類学』西宮：関西学院大学出版会、573-609。
- 東南アジア稲作民族文化総合調査団編 1959 『メコン紀行：民族の源流をたずねて』 東京：読売新聞社 日本民族学協会 東南アジア稲作民族文化総合調査委員会 1957 『東南アジアの稲作民族文化の総合調査趣意書』（神奈川大学日本常民文化研究所所蔵）。
- 中生勝美 2006 「日本占領期の社会調査と人類学の再編：民族学から文化人類学へ」末廣昭編『帝国の学知』第6巻、東京：岩波書店、144-178。
- 2007 “Shared Abodes, Disparate Visions: Japanese Anthropology during the Allied Occupation”, *Social Science Japan Journal*, Vol.10 No 2, October, 2007 pp.176-196.
- 2015 「植民地大学の人類学者：泉靖一論」『国際学研究』5号、47-69。
- 2016, “Clyde Kluckhohn : Political Position and His Tactics for Applied Anthropology in USA”, Ishikawa Hideshi, Josef Kreiner, Sasaki Ken'ichi, and Yoshimura Takehiko (eds.) *Origins of Oka Masao's Anthropological Scholarship*. (JapanArchiv, Band 12) Bier'sche Verlagsanstalt, pp. 125-141
- 2016 『近代日本の人類学史：帝国と植民地の記憶』 東京：風響社
- 中尾佐助 2004 『中尾佐助著作集第I巻 農耕の起源と栽培植物』札幌：北海道大学図書刊行会
- 2005 『中尾佐助著作集第IV巻 景観と花文化』札幌：北海道大学図書刊行会

- 2006『中尾佐助著作集第Ⅵ巻 農耕の起源と栽培植物』札幌：北海道大学図書刊行会
中尾佐助・佐々木高明 1992『照葉樹林文化と日本』東京：くもん出版
永廣敏雄 1988『雲崗日記：大戦中の仏教石窟調査』東京：日本放送出版協会
日本文科学会編 1953『社会的緊張の研究』東京：有斐閣
福井勝義 1986「京都大学、アジア・アフリカ言語文化研究所および国立民族学博物館を中心とした東アフリカ研究から」日本民族学会編『日本の民族学：1964-1983』東京：弘文堂、268-273。
松本信広編 1965『インドシナ研究—東南アジア稲作民族文化総合調査報告(1)』東京：有隣堂
松本信弘 1956「東南アジア稲作民族文化総合調査の計画」『民族学研究』20巻3・4号、223。
1958「東南アジア稲作民族文化総合調査経過報告」『民族学研究』22巻1・2号、122-123。
宮崎武夫 1943『蒙古横断：京都帝国大学内蒙古学術調査隊手記』東京：朋文堂
山極寿一・尾本恵市 2017『日本の人類学』東京：筑摩書房
山口裕文 2008「書評『稲作の起源』」『照葉樹林文化研究会ニュースレター』第2号、1-8。
山田隆治 1969『ムンダ族の農耕文化複合』東京：風間書房
1970, *Cultural formation of the Mundas*, Tokai University Press

ネット情報は、すべて2021年1月5日に確認した。